

また、著者のフィールド調査の結果、明らかにされたことの一つは、奨学金には2種類あること、一つは公式の、もう一つは非公式のそれである、という点である。公式の方は最高評議会管轄下の組織を通じて支給されるが、非公式のは法学権威が独自に支給する。こちらはすべての学生をカバーすることができていないが、公式の方はマドラサの入門課程ならびにその次の標準課程の学生全てをカバーする。モンタゼリーやサーネイーのような最高指導者ハーメネイーに批判的な法学者も、最高評議会管轄下の奨学金センターからの奨学金支給を割り当てられていたという貴重な観察結果とともに、奨学金の額はイランの標準世帯の給与所得よりも約\$1000／年多いこと、またこの公式奨学金は2003/4年から開始され、ハーメネイーが全体の32～34%を占めて最多額である旨を記す。さらにそこでは奨学金センターが各法学権威の支給額を監視する役目を担い、もって宗教界におけるハーメネイーの権威固めの役割を担っているとの所見を提示している。

また、最高評議会は国家に協力的姿勢を採る講師協会が寡占する状況にあり、この最高評議会が奨学金センターの設置を発案したことから、奨学金センターは法学権威各人の支給額を監視する役目を担っているとの見解が論じられている。

* * *

イランのシーア派宗教界は、宗教税ホムスという国家から独立した独自財源を持っていたこと、これがイラン革命時の反国王勢力の闘争資金を賄う財源として重要な役割を果たしことが指摘されてきた。このイラン宗教界の財源がもつ特質が変わりつつあることを記すこの章は、フィールド調査報告書である本書の中核的柱と言える重要性を持ち、本書の中で圧巻と言うべき高い意義を持つ箇所と評価されて然るべきであろう。また、これはかつてフィッシャーがイラン宗教界のフィールド調査を行って以来30年ぶりの宗教界のフィールド調査であり、その法灯を今後も絶えることなく続ける意義と必要性を示すものでもある。

なお併せて忘れずに付記すべき点は、イラン社会に脱宗教化と信仰の個人主義化の現象が顕在化しているという指摘である。この点も、観察を継続し深化させることの意義を示すものと言えよう（第8章p.158）。

（富田 健次 同志社大学神学部教授）

千葉悠志『現代アラブ・メディア——越境するラジオから衛星テレビへ』ナカニシヤ出版 2014年 iv+277頁

本書は、著者の千葉悠志氏が「あとがき」で記しているように京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文に加筆・修正を加え出版したものである。

構成から見えていくと、初めの「序章」のところで「アラブ・メディア研究史」と「先行研究の問題点と本書の視角」の節が設けられ、アラブ・メディアについての研究史が整理され、また、先行研究に見られる不十分な点と限界について述べている。続いて3部構成で本論が展開される。第1部の「アラブ・メディアを論じる視角」では、研究史を見ながら「国際コミュニケーション研究」がどのように発展し、そこにどのような問題があるのかについて検討し、また、本書の中で用いるアラブ・メディア研究へのアプローチについて説明している。第1部の後半では、本書が対象とするアラブ地域について述べられている。

第2部の「アラブ・メディア圏の形成と展開」では、1952年のエジプト革命後のエジプトでのメディア政策について取り上げられ、そしてラジオやカセットテープなど国家の統制をかいぐり国境を越えて情報と思想を伝えたメディアについて取り上げられている。第3部の「衛星放送時代の到来とアラブ・メディア圏の新展開」では、アル・ジャジーラなどのアラビア語の衛星放送の普及によって従来のメディア圏がどのように変化したかについて、また、アラブ諸国のメディアシティなどについて述べられている。

本書は、著者が「この地域のメディアには国境を越えた歴史的かつ重層的な結びつきが存在している」と述べているように、アラブ世界におけるメディアの発展を跡付けながら、メディアが作り出しているトランスナショナルな空間について明らかにしようとしたものである。そのために、本書では、メディアを取り巻

く各国の政治・社会状況について検討し、また、新聞・ラジオの時代から衛星放送の時代へと、メディアをめぐる変化にも注意を払いながら、アラブ・メディアが歴史的に果たしてきた役割と現在の位置について明らかにしようとしている。

評者は中東地域研究に従事しており、メディアに関する研究は専門ではない。中東地域研究の視点から、本書の書評を記したい。

第1に、本書の中ではアラブ・メディアについて詳細に記され、評者の知る限り、事実関係の記述も正確であり、本書は、わが国で初めての本格的なアラブ・メディアについての研究書であると評価できよう。わが国ではアラブ・メディアについての研究の蓄積が少なく、類書がないこともあり、中東地域のメディア研究にとって、さらには中東地域研究にとって大きな意味のある出版である。「アラブの春」を経てアラブ世界の政治は流動化しており、そこでのアラブ・メディアの果たす役割に注目が集まっている。本書は、時宜をえた出版であり、読者の関心にこたえてくれる好著である。

本書の中ではアラブ・メディアの発展と現状について、とくにその外形的な側面については詳しく述べられている。しかし、アラブ・メディアが流してきたコンテンツに踏み込んだ分析は十分とはいえない。アラブ全体あるいは各国の文化や政治の流れの中で、コンテンツを通して放送が果たしてきた役割について突っ込んだ分析があってもよかったと思われる。千葉氏は本書の104頁で「アラブ諸国のメディアは国民統合を強化する側面と、地域統合という国民国家の枠を超えたアラブやイスラーム的な連帯を求める側面という一見矛盾した2つの側面を内包させてきた」と記しているが、アラブ・メディアの研究はアラブ世界における国民統合と地域統合の問題を検討する上で格好のテーマと思われる。今後の研究の展開に期待したい。

3番目に指摘したいことは、海外メディアが中東報道で果たした役割について、とりわけBBCのアラビア語放送について、もう少し評価しても良いのではないかという点である。1979年のイラン革命に際しBBCはそのペルシャ語放送でイランの内政状況を放送し続けた。イラン革命後にイギリスとイランの関係が悪化し、その原因のひとつがBBCのペルシャ語放送にあったとされるが、BBCのペルシャ語放送がイラン内政に影響を与えていたことを示している。アラブ諸国では、とりわけ政治に関する報道ではアラブ・メディアには強い規制がかかっており、アラブ・メディアの報道は国民が知りたい情報を与えるものではなかった。そのため、アラブ人の間には、アラビア語で正確なニュースが聞ける海外からのアラビア語放送を聴いていた人々も多かった。BBCワールドサービスのアラビア語放送は1997年にはサウジアラビアだけで100万人以上のリスナーがおり、アラブ世界では1,400万人のリスナーがいたとされるように(Arab News, 1997年5月10日付け報道)、とりわけBBCのアラビア語放送の人気が高かった。衛星放送やソーシャルメディアの発展した現代では状況は変化したが、BBCなど海外メディアがかつて果たした役割とその影響についても、もう少し突っ込んだ検討があっても良かったように思われる。

4番目は、本書が、博士論文に基づいていることと関連しているように思われるが、序章と第一章が少々読みづらい内容になっていることである。本書のタイトルは、『現代アラブ・メディア——越境するラジオから衛星テレビへ』となっており、アラブ・メディアをめぐる問題を読みたいと思って本書を手にとった読者は、序章と第一章で少々気を削がれるのではないと思われる。構成上の工夫が必要であったと思われる。

最後に、衛星放送の開始年についての評者の経験を、補足として記しておきたい。評者は1983年10月から2年間オマーンのマスカトに滞在したが、1984年頃には、アラビア半島では衛星放送が行われており、一部の現地人もパラボラアンテナを設置し衛星放送を視聴していた。その衛星放送はアメリカ軍がかかわって放送していたものである。当時、中東には海兵隊など多数のアメリカ兵が存在しており、孤立した状態に置かれニュースや娯楽に飢えていた軍人向けに衛星放送を開始したのであった。この衛星放送は一部の現地人も視聴し、その経験が後の衛星放送の発展につながったのではないと思われる。

「アラブの春」を経てアラブ・メディアに関する関心が高まっており、研究書としての本書の価値は高い。また、アラブ・メディアの研究は様々な可能性を秘めており、「ダイヤの原石のようなすばらしいテーマ」(264頁)であると思われる。今後の研究の展開を期待したい。

(福田 安志 早稲田大学イスラーム地域研究機構教授・上級研究員)